

Heinz Enders: *Sprachlogische Traktate des Mittelalters
und der Semantikbegriff—Ein historisch-systematischer
Beitrag zur Frage der semantischen Grundlegung
formaler Systeme*

(Veröffentlichungen des Grabmann-Institutes, Neue Folge 20)
Verlag Schönningh; 1975. pp. XXIII+248

山下正男

中世論理学の歴史を記号論理学のテクニックを使用しながら書き下ろすという作業は、Moody の *Truth and Consequence in Medieval Logic* (1953), Bochenski の *Formale Logik* (1956), Boehner の *Medieval Logic* (1959) 以来相当の年月を経て、それだけに大いに豊かになってきた。しかしそれらの仕事は、ボヘンスキーの上掲の著書のタイトルが示すように、形式論理学の立場から、より正確に言えば、semiotics (記号論) のうちの syntax (結合論) の立場からなされたものであった。ところで近代的記号論には、結合論と並んで semantics (意味論) という分野がある。そしてこの意味論の分野は、結合論に較べて、かなりおくれて出現するのであって、さきの三人の著書にはその成果はあまり利用されていなかった。しかしながら近年の意味論研究の進歩とともに、そうした現代の意味論の成果をふまえながら、中世論理学の意味論を解明しようとする動きが生じてきた。そしてそういう仕事をもっとも大規模な仕方でやってのけたのが Enders の本書による仕事であるといえる。

この書物は Enders が1972年にミュンヘン大学でおこなった夏学期のセミナーをもとにしてできあがったものである。そうした事情もあってか、この書物はいわゆるドイツ的徹底性の見本のようなものであり、一方においては、中世の意味論に関するいままでの他人の業績を網羅するとともに、他方においては、自己の体系にもとづいてあらゆるデータを再構成するという営みがなされている。したがってその意味では、この書物は確かに使い度があるとともに、またいささか読みづらい本で

もある。

この本は大そう内容のつまった本であるがそのうちでもっとも有益なところをいくつか紹介してみよう。さてこの書物でもっとも圧巻というべき箇所はやはり、*suppositio* 論（代表の理論）の分析であろう。簡潔に紹介するために表を掲げよう。

表 I

第2次レベル	高次言語（文字記号、音声記号、心的記号）	
第1次レベル	a) 外的記号（文字記号、音声記号） b) 内的記号（心的記号） <i>esse subjective, intentio</i>	(a)
零次レベル	a) 内的指示対象 <i>esse objective, lekton, fictum, Gedanke</i> b) 外的指示対象 <i>res</i> （精神外の事物）	(δ) (β) (γ)

意味論とは記号とその指示対象との関係を扱う理論である。そして表 I でいえば、第1次レベルはそれ自身記号として、ものとしての零次レベルをその指示対象としてもち、第2次レベルはそれ自身記号として、これまた記号である第1次レベルをその指示対象としてもつ。そして零次レベルはいかなる指示対象をもたず、したがってまた記号とはならず、ただ指示対象となるだけである。

以上のことがらは別にこと新しいことではないが、Enders の創見ともいうべきものは表 I の第1次レベルと零次レベルをそれぞれ a) と b) に二分したことである。つまり第1次レベルの b) に内的記号を、零次レベルの a) に内的指示対象を導入したことにある。ところで内的指示対象の例は表 I にもあるように、*esse subjective*（心的作用）であり、*intentio*（概念、意識作用）である。また、内的指示対象の例は *esse objective*（心的所産）、*lekton*（言語の非物理的指示対象）、*fictum*（心的仮構物）、*Gedanke*（思考内容）である。こうして第1次レベルの b) と零次レベルの a) をつけ加えることによって、Enders は古代や中世においてしばしば登場してくる心的あるいは心理的な諸概念を意味論の中にうまくとりこんだのである。そして彼はこうした意味論的な枠組をしつらえたうえで、*suppositio materialis*（質料的代表。記号が他の記号を指示する作用）とは指示作用 (a) であり、*suppositio formalis*

形式的代表。記号が対象一般を指示する作用)とは(β)であり, *suppositio personalis* (個体的代表。記号が個物を指示する作用)とは(γ)であり, *suppositio simplex* (端的な代表。記号が心的指示対象を指示する作用)とは(δ)であるとしたのである。

中世の意味論といえば *suppositio* 論の他に, *modi significandi* 論(意味の様態論)というものがある。前者が中世のいわゆる *Sprachlogik* (言語的論理学)の花形だとすれば, 後者は *Grammatica Speculativa* (思弁的文法)の花形だといえる。さてこの意味の様態論に対しても, Enders は次のような表によって, その本質を明確にしている。

表 II

第1次レベル	a) 外的記号 <i>vox significans</i> b) 内的記号 <i>conceptus significans</i>	a') 外的記号の様態 <i>modus significandi activus</i> b') 内的記号の様態 <i>modus intelligendi activus</i>
零次レベル	a) 内的指示対象 <i>conceptus significatus</i> b) 外的指示対象 <i>res significata</i>	a') 内的指示対象の様態 <i>modus intelligendi passivus</i> b') 外的指示対象の様態 <i>modus significandi passivus</i> <i>modus essendi</i>

ここで第1次レベルと零次レベルをそれぞれ a), b) に二分するという枠組はまえとおなじである。すなわち外的記号としての *vox significativa* (意味作用をもつ音声)と外的指示対象としての *res significata* (意味作用の対象)という能動・受動のペアーの間に, 内的記号としての *conceptus significans* (意味作用をおこなう概念)と内的指示対象としての *conceptus significatus* (意味作用の対象としての概念)という能動・受動のペアーを内挿するわけである。そして以上のような意味論的枠組の右方の欄に, 左方の欄に対応するものとして *modus significandi activus* (意味作用の様態)と *modus significandi passivus* (意味対象の様態)というペアーと, *modus intelligendi activus* (概念作用の様態)と *modus intelligendi passivus* (概念内容の様態)というペアーを書き込むのである。

ところで, 一般に, *modus* (様態)というものは, なんらかの実体の様態であり,

しかも一般には一つの实体に対して、複数の様態が存在する。さて第1次レベルの a) の例を、単に“流れること” (fluentum) とすれば、この“流れること” の様態としては“それは流れる” (fluit), “それは流れた” (fluxit) 等々のような活用形を挙げることができる。そして思弁文法を唱える文法学者、すなわち様態派 (Modistae) は、文章というものは実は fluit や fluxit といった様態から構成されるのであり、したがってそうした様態こそがいわゆる *pars orationis* (文の要素) と呼ばれるべきものだと言ったのである。

いま述べたような、实体とそれに対する様態との区別は、第1次レベルの a), a') の場合であるが、そうした区別が、実は第1次レベルの b), b') および零次レベルの a), a'), b), b') においてもおこなわれるのであり、それに対するいささか形式主義的なテクニカル・タームが先に述べたものだったのである。ちなみに零次レベルの b') である *modus essendi* (存在の様態。ものの様態) についていえば、おなじく b') の *modus significandi passivus* が b) の *res significata* のうちの“*significata*” の側面についての様態を強調したのに対して、“*res*” の側面についての様態を強調したものであるといえるであろう。

こうして Enders は *suppositio* の問題も、*modus* の問題もともに零次レベル、第1次レベルといった枠組で整理できることを明らかにしたが、ほかになお、主語・述語関係の問題および論理的パラドックスの問題もまた同じ枠組を使って解明できることを示してみせる。

主語・述語関係はいろいろの立場から解釈されるが、Enders はいわゆる同一性理論を最もよしとする。同一性理論とは主語と述語の同一性を主張するもので、例えば“*Socrates est animal*!” という命題を“ソクラテスはある特定の一個の動物と完全に同一である”というふうに解釈するものである。この同一性理論は現代の論理学者の Quine などがとる説であるが、中世ではジャンボアのウィリアム、アベラール、オッカム等が主張したものであった。そしてそうした同一説は、いかなる記号の指示対象も終局的には零次レベルの b) にまで至りつくものだという立場にほかならないのである。

最後にパラドックス (*impossibilia*) の解決に入ろう。ここでも零次レベルから第1次レベル、第2次レベル、そして加えるに第3次レベルといった諸レベル間の区

別が利用される。それを表示すれば、つぎのとおりとなる。

表 III

第3次レベル	“その命題は偽である” (偽) 高高次言語
第2次レベル	“その命題は偽である” (真) 高次言語
第1次レベル	“雪は白くない” (偽) 対象言語
零次レベル	雪は白い 現実の事態

ここではレベル間の区別は、いままでのように単なる辞書的な単語 (dictio) および単語の活用した形としての文章の構成要素 (pars orationis) に対してではなく、文章に対してなされている。すなわちここでは零次レベルに属するものは単なる“もの”ではなしに“事態” (Tatbestand, Sachverhalt, state of affairs) である。そして第1次レベル以上はすべて一個の文章であり、第1次レベルは対象言語 (object language), 第2次レベルは第1次レベルの対象言語に対する高次言語 (metalinguage), 第3次レベルは第2次レベルの高次言語に対する高次言語, したがって第1次レベルの対象言語に対する 高高次言語 (metametalinguage) だということになる。

ところで例にあげた三つの命題であるが、第1次レベルの命題“雪は白くない”は、現実の事態は白いのだから偽である。つぎに第2次レベルの“その命題は偽である”は“その命題”が第1次レベルの“雪は白くない”を指すとすれば真である。しかし第3次レベルの“その命題は偽である”は、その主語である“その命題”が第2次レベルの真なる命題を指すとすれば、偽である。ところで第2次レベルの命題と第3次レベルの命題はともに“その命題は偽である”であって同じであるのに、第2次の方は真となり、第3次の方は偽となる。そしてこれは矛盾のようにみえる。とはいえそうした矛盾は、命題としてはともに“その命題は偽である”であって同じであるが、それら二つはレベルが違うのだから、一方が偽であり、他方が真であってもおかしくないとして説明することによって解決されるのである。

ところでこの解決は Enders によれば、すでにザクセンのアルバートの示唆するところであった。すなわちアルバートは, *impositio dependens* (依存的真理値付与) の理論を提出した。そしてこの理論は、つぎのような規則を提案するものである。

「ある命題の真理値が他の命題の真偽に依存する場合は、その命題の真理値はそれ自身では決定できない。」(Numquam impositio est admittenda, ubi significatio illius, quod imponitur, dependet ex veritate et falsitate propositionis, in qua ponitur.) したがって、“雪は白くない”はいかなる命題にも依存せず、ただ零次レベルの雪は白くという事態によるだけで偽であると決定されるのであり、それゆえそれは非依存的真理値付与である。しかし第2次レベルの“その命題は偽である”は第1次レベルの“雪は白くない”に依存しており、第1次レベルのそうした命題が偽であるから、“その命題は偽である”という命題は真となるのである。そして第3次レベルの“その命題は偽である”という命題もいまと同様、依存的真理値付与のケースに入るのである。

以上で本書の主要な論点を評者流にまとめ上げて述べてみたが、この本を実際に読んでみれば、論旨は十分に一貫してはいるが、その読みにくさに大いになやまされることであろう。例のドイツ的徹底性のゆえに、他人の業績を大へん利用するのはいいが、とるに足らぬ意見までもとりこもうとしているのは無駄な努力のように見える。誤植もなかなか多く、そのうえ印刷上の不手際による乱丁まであって閉口させられる。とはいえ本書が、これからの中世論理学における意味論研究のための重要な礎石の一つとなるであろうことは断定してもよいと思われる。

Alfonso Maierù: *Terminologia logica della tarda scolastica, Lessico Intellettuale Europeo, VIII*

Edizioni dell'Ateneo, Roma 1972, pp. 687.

F. ペ レ ス

論理学や言語に関する中世後期の思想は現在広く研究されており、この分野のものとして Maierù の著書は見逃せないものである。本著は T. Gregory の指導の下で書かれ、L. Minio-Paluello といった学者の協力をも得ており、またこの分野のた